

いつもの展開通りシーツを剥ぎ取られる。

「うわあっ！」

がばあっ！

だが、今日は布団が元に戻される。

「浩平...は、裸だよ～っ！」「ん...？ええっ？」

俺は上体を起こし、シーツの下を覗き込んでみる。一糸纏わぬ素っ裸だった。

「うっ、うわあああっ！瑞佳、おっ、お前っ！」「ご、誤解だよっ！なんにもするわけないよっ！」「じゃあどうして俺は裸なんだっ!？」「知らないってばっ!...布団剥いたら、裸だったんだよっ」瑞佳、何もこんなことしなくても、俺はだなぁ...」「はあっ、冗談言ってる暇があったら早く着替えようよ...。今日も勉強するんだよっ」

そう言って、瑞佳は俺に着替えを手渡した。うーん...さすがというか...。体裁の悪い濡れ衣を着せて、からかってやろうと思っていたが半ばで見破られてしまったらしい。

「いや、瑞佳に俺の生まれたままの姿を見てもらいたかったんだよ」「見たいわけないよ、そんなもの」「そうか、それは残念」

仕方なく、服を着る。さすがに、今日は第2土曜日なので学校は休みだ。今日も明日の模試のための勉強をしなければいけない。はあ、気が重い...

「まったく...浩平にはいつも驚かされるよ...」「はあ？別に...あんなのライフワークじゃねーか」「ら、ライフワークって...」「まあ、そんなことよりも、せっかくだし、さっそく始めるとするか?」「なにを?」「.....」「.....」「...ふざけんなよ」「ご、ごめんなさい」

そういうわけで、今日も瑞佳と一緒に勉強した。国語と地理を勉強した。理科はどの科目を受けるのか決めていないので、行き当たりばったりだが、とりあえず化学を勉強するか...

「じゃあ、早速だけど、浩平っ。じゃじゃんっ。問題です!単量体が 反応を繰り返して高分子になる反応を付加重合という。 にあてはまる言葉は何?」「反応...飯能、秩父、所沢...じゃあ、ありませんよ~」「何くだらないこと言ってるのよ...」「んっと...付加反応、だったっけ?」「ぴんぽーん。正解で~す。じゃ、次は...ベンゼン環にカルボキシル基と...」

...このようにして、昼ご飯の時に休憩を挟んだ以外、勉強ばかりしてすごした。6時くらいになって、そろそろ勉強をやめようかと思ってきたときに...

「ねえ、浩平。今晚はうちの親が遅くなるっていうから、どこか食事にでもしに行かない?」「おお、構わんぞ。どこに行く?あ、マックはお断りだからな」

...マックじゃなくてマクドだっ!

「あ、あれ?浩平...今、なんか変な声がしなかった?」「う、うん、俺もそんな気が...。疲れてるのかなあ...」「そ、そうだねえ...。あははははは...」「それじゃ、どっか行くか。とりあえず駅前に行こうぜ」「うん」

...そうやって駅前に出てきたが...いい店が無い。マックはよく学校帰りに立ち寄っているし...

.....マックじゃないっ、マクドだっ!

...やはり幻聴が聞こえた...。いったい、どうなっているんだ、この世界は。まあ、気にすることでもないか。うーん、だったら...どこにしよう。そういえば、このへんにこないだ入っておいしかったカツ丼屋があったなあ。そこにしようか...。...と、待てよ?そういえば、最近この近所にファミレスができたらしいよなあ。ファミレスは値が張るのでほとんど利用しないが、たまにはいいかもしれない。行ってみっか。

「瑞佳、このへんにファミレスができたんだよな」「うん」「だったらそこに行ってみないか?」「うん、いいよ」

赤地に白い文字の看板とが目印の「キャロット」の店内に入る。「いらっしやいませーっ！レストラン・キャロットへようこそ～」ウェイトレスの案内で奥へ進み席についた。

「では、ご注文はいかがいたしましょう？」「私はハンバーグステーキ定食で」「パンにいたしましょうか、ご飯にいたしましょうか？」「ではパンで...」「かしこまりました。お連れ様はいかがいたしましょう？」「うーん、じゃあ、和風ハンバーグステーキデミグラスソース煮定食」

これは名前の通り、和風ハンバーグに、何故かデミグラスソースをのせて、和風の雰囲気を出している素晴らしいセットだ。

「...浩平...そんな変なもの食べるの？」「ああ、悪いか？」「いや...」「お客様、パンとご飯、どちらにいたしましょう？」「パンで...」「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「じゃあ、ビールくれ」「かしこまりましたあ！」

.....お酒は二十歳になってから！

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「...あれ？」

俺、今、ちゃんと頼んだはずなんだが...

「コーラとウーロン茶、オレンジジュース、あずきオーレ、タヒボドリンクがありますが」...すごくマニアックな店だ...。普通、タヒボドリンクは置いてない。タヒボドリンクも魅力的ではあるが、やはりここは...

「じゃあ、ビール！」

...だから、お酒は二十歳になってからっ！

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「.....」「コーラとウーロン茶、オレンジジュース、あずきオーレ、タヒボドリンクがありますが」

うーむ...。何か納得いかんなあ...。だけど、これじゃ先に進まないし...

「じゃあ、あずきオーレ」「かしこまりましたあ。お飲み物はいつお持ちいたしましょうか？」「先にくれ」「かしこまりましたあ。お連れ様はいかがいたしますか？」「私はウーロン茶。先にお願ひします」「かしこまりましたあ」「あ、あと、ビールを...」

...はい、お約束。

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「あずきオーレ。料理より先に持ってきて」「私はウーロン茶。料理より先にお願ひします」「かしこまりましたあ」「あ、あと...」

...同じギャグは3度まで！

「いえ、なんでもないです...ぐすっ...」

まあ、こんな感じで晩ご飯は楽しく(?)瑞佳ととったのだった。

[2月13日・日曜日]

カシャアツ！

「ほら～、起きなさいよ～っ！」

耳障りな音と共に視界が白くなる。まぶしい。そうか、朝か。.....。.....。眠い。やっぱり眠い。

ガバアツ！

布団を取られた。だが、これくらいは慣れたものだ。瑞佳は俺を甘く見ているようだ。それくらいで起きる俺じゃない。当然、体を丸めて対抗する。

....。.....。.....。ぐーっ。

バフッ！

おっ、今度は布団をかぶせてきたか。しかもその上に瑞佳が乗っかってきているから重たいんだ。確か数日前にもこんなことされたような…。やっぱり息苦しいし暑い。

「ぐわあつ、ぐおつ。…。……。ぶわあああつ」

俺は二度目ともなると慣れたもので、楽々上から押し付けられていた布団をはねのけ、飛び起きる。

「ふう～、やっと起きたね」「あと30分～っ!」「ダメだよ、今寝たら浩平は遅刻するもん」「大丈夫だって、俺を信じられないのか?」「確か2週間前にそんなことって12時半まで寝て遅刻しなかったかなあ?」「そんな昔のことなんて覚えてない」「浩平の昔っていつなんだよ」「3分前」「...そんな冗談言ってどうするの」「だいたいなあ、お前、起こし方もワンパターンだぞ」「だったらどうやって起こして欲しいの」「やっぱりメイド服を来て『ご主人様、朝でございます』とか言って…。それは男の永遠の憧れなんだぞっ」「浩平ってそんな趣味があったの?」「あ、いや、冗談だ。だが、上に布団をかぶせるのはやめてくれ。暑い」「そうしないと起きないじゃないの」「だったら布団をかぶせずに瑞佳が乗っかってくれ」「なんで?」「そりゃなあ...」

瑞佳が、俺の考えていることを察したか、顔を赤らめて下を向いた。

「嫌だよ...」

ふっ、勝ったな。得意顔で胸をはって見せる。しかし、しばらくしてから、

「でも、浩平が絶対に素直にすぐに起きるんだったら考えておくよ」

…。いや、そう正直に反応されても困る。仕方ない。

「いや、冗談だよ」「もうっ! からかわないでよ」「かわいそうだから今日はさっさと着替えてやろう」

俺は制服と鞆を片手に部屋を後にした。台所に行ってはみたがやはり誰もいない。秋子さんはもう会社に行ったらしい。今日も、秋子さんが玄関にいた俺のことを瑞佳に頼んだんだろう。そして、今日の朝食を見てみると...おや? 食卓の上には何も無い。あるべきはずのものが無い。それが現実的ではない違和感として体を捉えた。朝食が食卓の上に用意されていないだけでそこまでのことを思うものだろうか。秋子さんだって忙しい。これくらいのことで責め立てては申し訳ないくらいだ。だけど、今現実に俺が感じてしまっているこの違和感はなんなんだろう...。よくわからない。だけど、何か引っかかる。…。いったいなんなのだろう。この違和感は...。

「よし、準備オッケー。いくぞ、瑞佳」

とりあえず食卓の上に食べるものがなかったし冷蔵庫の中にも食べ物でめぼしいものはなかったから朝食は抜きでいいことにした。

「はいはい」

そして、いつものように家を出る。今日は時間が比較的残っているようだ。ならば、と、歩いて行くことにする。いつもは走りぬける風景も、歩いてゆったり行くというのもいいものだ。

「今日は佐々木ゼミの記述模試だね」「ああ」「難しいらしいんだけど大丈夫?」「ああ」「そういえば、もう来年は入試なんだよね」「ああ」「そろそろ志望校を決めないといけないんだよね」「ああ」「浩平、ちゃんと勉強してる?」「ああ」「浩平の行きたい大学ってどこ?」「ああ」「ああ大学なんて学校ないよ?」「ああ」「浩平～!?」「ああ」「話聞いている?」「ああ」「もうっ...」「ああ」「浩平! 前っ!」「ああ」

ばきっ!

「ぬよやよわあふや～」

俺は意味不明の叫びをあげた。な、何か顔が痛い。何があったんだ!? 気がつくと俺は電柱に求愛しているような姿勢だ。な、なに、誰かがこの電柱を俺の進路の真正面に持ってきたんだな! 誰だ誰だ。俺がきょとんとしてると、瑞佳が

「何考えてたの?」

とたずねてきた。

「いや、別に。ただボーっとしてただけだ」

...俺の頭の中では今朝のことがずっとひっかかっていたのだ。この違和感。これは一体何なのだろう。一体何が起ころうとしているのだろう。...一体...。そんなことを考えながら歩いていたのだ。

「浩平、気をつけようよねえ」「ああ」「『ああ』以外の返事をしようよお」「ああ」「浩平っ!」
「冗談だって」

ドンッ!

瑞佳と漫才みたいなことをしていたら誰かにぶつかってしまった。誰かと想って見ると、七瀬らしい。

「あ、おっはよ、瑞佳」「七瀬さん、おはよう」

七瀬と瑞佳はこんな日常的な会話を交わした。...だが。七瀬が俺を見る視線に怪訝さが混じっている。瑞佳と俺を交互に見比べている。まるで、「こいつ、誰?」と言っているような感じだ。...七瀬はしばらく考えていたが、

「私、先に行く」

とだけ言い残して先に行った。なんだろう。どうなっているのだろう。今朝は秋子さんに俺の存在を忘れられたような感じだった。そして、今は、七瀬にまるで忘れ去られたような...。一体どうなってるんだ...

教室に入って模擬試験を受けるときも、自分の席はちゃんとあった。だが、担任も俺のことを不思議そうな目で見ている。クラスのほとんどの奴も俺のことを怪訝な顔で見ている。

本当に、何がどうなってしまったのかわからない。いつも授業が終わると必ず話しかけてくる北川や七瀬も模擬試験が終わったときには話しかけてこなかった。誰にも声をかけられなかった。瑞佳を除いては。

瑞佳と一緒に学校から帰る。途中で出会う人も、誰もが俺の存在を知らない。俺が存在しているこの世界は一体どうなってしまったのだろう。

赤い夕日を見上げて考えながら歩いた。

まるで、空にこのままおちていってしまいそうな感覚がする。そして...。夢。夢を見ている。そんな感覚だった。

そして...ボクはまたこんな場所にいる。

うあーん! うあーん! うあーん!

泣き声が聞こえる。

誰のだ...?

ボクじゃない...

そう、いつものとおり、あゆの奴だ。

「うあーん! おかあさーんっ!」「どうしたの、あゆ」「うぐう。お兄ちゃんが、たたいたあーんっ!」「浩平、あんた、またっ! なにしたのよっ!」「ちがうよ、遊んでただけだよ。猪木の気合入れごっこして遊んでいただけだよ」「そんなのごっこ、なんて言わないのっ! あんた前は、60文キックごっこが言って、泣かしたばかりじゃないのっ!」「ごっこ

だよ。本当の60文キックや猪木の気合入れは真似できないくらい効くんだよ?」「ばかな理屈こねてないで、謝りなさい、あゆに」「うあーんっ!」「うー...あゆお...ごめん」「ぐすっ...うん、わかった...」「よし、いい子だな、あゆは」「浩平、あんたが言わないのっ!」

実際あゆが泣き止むのが早いのは、別に性分からじゃないと思う。ボクが本当のところ、あゆにとっては、いい兄でありつづけていたからだろう。そう思いたい。母子家庭であったから、あゆはずっと父さんの存在を知らなかった。ボクだってまるで影絵のようにぼんやりとした覚えてはいない。動いてはいるのだけど、顔は全然はつきりとしなない。どんな顔をしていたのか、全然思い出せない。そんなんだから、あゆには、男がどのようなものなのかということも教えてあげたいと思っていた。だから、父親参観日には、あゆのためにも変装して出席してやろうと思っていた。みんなに、あゆにさえ、バカにされたけど、でも、構わない。ボクができるだけのことをあゆにやってやりたかった。あゆの笑顔を見たかった。だから、他のひとに笑われる、ということも怖くなかった。

「あゆ、絶対父親参観日にボクが行ってやるからなっ」「ええ、お兄ちゃん無理だよ」「大丈夫だ。お兄ちゃんを信じろ!おおふなにのったつもりでまってる」「おにいちゃん、おおふなじゃなくておおぶねだよ」「フランス語で言ったらそうなるかもしれないな。まあ、だいじょうぶさ。なんとかしてみせるよ」「うん、がんばってね!」

ところが、ある冬の日のこと...。そろそろ変装道具を準備しなくてはいけないな、と思い始めた頃だった。あゆは、木の上から落ちて頭を強く打ってしまった。そして...何も話さなくなってしまう。目を覚ますことすらなかった...。だけど、みんな、あゆは病気で眠っているだけでももうすぐ目を覚ます、とばかり言っていた...

「バカだな、おまえ。こんなときに病気になって」「.....」

あゆの邪魔そうな前髪を書き上げてやりながら窓の外に目をやると、自然の多く残る町の風景が見渡せた。そして、秋が終わろうとしていた。

「あゆお~」「.....」「あゆ、退屈してると思ってな」「.....」「本を読んでやろうか?...こんな文字ばかりのものが面白いわけないな。だったらまんがをよんでやろうか?」「.....」「じゃ、オセロをやろうじゃないか」

ボクは借りてきた碁盤と碁石を、あゆに握らせた。

「何なの、これ?」、とあゆが言っているような気がした。

「わからないか?碁盤と碁石と呼ばれるものだ。専門用語ではな」「.....」「これでオセロをするんだ。ごぼんって、オセロをするためのものじゃないけど、気合があればなんとかなるっ!」「.....」

しかし、話聞いていたのとは違って、あゆの病院生活はいつまでも終わりそうになかった。あゆは大きな手術をして、あゆの体があゆの体じゃなくなってしまうみたいだ。そして、この時期から母さんも病院でない別の場所に入り浸るようになっていった。どこかはわからない。だけど、時々現れてはボクたちが理解できないようなわけのわからないことを言って、満足したように帰っていく。「せっぽう」とか言っていた。どんなものなのかは全然わからないけれど...。だけど、ぐるがどうかした、救済がどうこう、ということもいっていた...。なんだったんだろう...

「わ、病室まちがえたっ!」「.....」「...あれ...でも...あゆか?」「.....」

あゆは、髪の毛がなくなってお寺のお坊さんみたいになっていた。

「びっくりしたぞ、お兄さんは」「.....」

ただでさえ、ここのところやせ細ってきているというのに、さらに髪がなくなってしまうものなら、ボクだって見間違えたような気がしてしまう。それくらい、あゆの姿は変わってしまっていた。

だけど、ボクはあゆに「苦しいか」と聞くことはしなかった。あゆは寝ているから返事をしないだろうとは思っていたけれど、もし起きている時に聞けば、あゆは絶対に、「そんなことないよ」というに決まっていた。気を使わせたくはなかった。だから、聞かなかった。本当に苦しかったり、辛かったりしたら、自分から言い出すだろう。そのときに、そばにいて、なくさめてやればいだろう。元気づけてあげればいだろう。そう思っていた。

年が明け、正月もあゆは病室で過ごしていた。ボクも、こんなに静かな正月を送ったのは生まれてはじめてだった。

「あゆの今年の願い事はなんだ?」「……………」「もちろん元気になることだよな。それで、お兄ちゃんがきてくれる、父親参観をすることな。去年は無理だったもんな」「……………」

時間はあの時からとまっていた。準備をはじめていた変装道具も、そのままに部屋においてある。何か、変わったことがあるといえば、あゆの病気だけだという気がする。

正月が終わり、街並みが元通りの様子に戻って行く。だけど、あゆの過ごす部屋と病気の状態だけは変わっているようには思えなかった。

「あゆー」「……………」「また、手術するって聞いて、きたんだよ。大丈夫かい?」「……………」

だけど、あゆはやはり目を覚まさない。怖いくらいに静まり返る室内。部屋の中には、あゆの体にもつながっている機械が立てる音だけしかしない…。

「……………」「あゆー」

……………。

「…あゆ?」

……………。

「あゆっ!」

……………。

「あゆーっ!あゆーっ!」「……………」「おやすみ……………」

月がまた変わった。でも、やっぱりボクたちは、なんにも変わらないでいた。あゆは誕生日を迎え、病室でささやかな誕生会をした。でも、あゆ以外にはボク一人しかいなくて、ボク一人が歌を歌って、そして、ボク一人がケーキを食べただけだった。あゆは、やっぱり目を覚まそうとはしなかった…。

……………。…………。「…………」「…………」「今日をちちおや参観日にしようよ、あゆ」「…………」「今日にしよう…………」「…………」

ボクは大急ぎで家に戻って、変装道具を取ってからそれを抱えて病院へと戻った。そして、病院の廊下でボクはそれを身につけて、変装をした。スーツを着て、ネクタイを締めて、そして厚底の靴をはいた。そして、マジックで髭を書いて、そして変装を完了、ということにした。甲高い靴音をたてながらあゆの部屋に向かう。ドアの前に立ち、そしてノックをする。ノックより靴音のほうがよく響いていたと思う。

「あゆー」

ドアを開けて中に入る。

……………。

「あゆーっ」

.....。

「...あゆーっ?」「.....」

あゆは相変わらず眠ったままだった。だけど、息が何か苦しそうだった。だけど、あゆが苦しい、辛いと言い出さない限りは、ボクも平静を装うことにしていた。

「じゃ、おとうさんがみてやるからなっ」

ボクは壁を背にしてたち、ベッドに身を横たえているあゆを見つめた。ただ、あゆの様子を眺めているだけだ。それしかできない。

「.....」

.....。

「.....」

.....。

「.....」「あゆっ?」「.....」

.....。

「うー...ふう...はうっ...」

苦しげな息が断続的にもれる。ボクはそんなあゆの苦しげな姿をただ見つめていることしかできなかった。

「はあっ...あうううっ...」

なんてことだろう。こんなに妹が苦しんでいる時に、ボクがしていることは、一番妹から離れた場所で、ただ単に突っ立ってみているだけだなんて。

.....。

「はあああああつ...あうううっ...」

.....。

そして、ついに、あゆの口から...

「はああああううっ...くるしいっ...くるしいよお、おにいちゃんっ...」

だから、ボクは走った。変な靴をはいているから転んでしまったけど、とにかくあゆの元にかけた。あゆは今になってやっと目が醒めたんだ。

「あゆ、だいじょうぶだぞ。お兄ちゃんがそばにいてやるからな」「いたいよ、おにいちゃんっ...いたいよおっ...」「だいじょうぶだぞ...。ほら、おにいちゃんがそばにいてやるから」「はあああつ...あうううっ...お、おにいちゃん...」「どうしたんだ?お兄ちゃんはここにいるぞ」「うんっ...ありがとう...、おにいちゃん.....」

...だけど。.....。

ボクはあゆにとっていい兄でありつづけたと思っていた。そう思いたかった。そして、最後の言葉は、そのことに対する感謝だと思いたかった。

あゆの葬式は、一日中しとしと降りしきる雨の中で行われた。すべての音や感情でさえも、かき消されてしまったような、そんな静かな葬式だった。冷めた目であゆの収まる棺を見ていた。母さんは最後まで姿をみせなかった。ボクはひとりになってしまったことを痛みとしてひしひしと感じていた。

そして、ボクしかいない家の中で、誰もいなくなったあゆの部屋をみたとたんに、ボクの中からせきを切ったようにして涙がこぼれだした。こんなに悲しいことが待っているなんて知らずにボクは生きていた。ずっとあゆと一緒にいられると思っていた...。ずっと、あゆがボクのことをお兄ちゃん、と呼んでいて、あゆの笑顔を見て幸せな気持ちになれることなんてなくなってしまったんだ...。すべては失われて行くものなんだ...。そして失ってしまった時に、こ

んなにも悲しい思いをする。まるで、悲しむために生きているように思えた。悲しむために生きるくらいなら、この場所に留まっていたい。ずっとあゆと一緒にいた場所にいたい。

.....

うあーん！うあーん！

泣き声が聞こえる。

誰のだ...？

ボクじゃない...。

そう、いつものとおり、あゆの奴だ。

「うあああああああーん」「うー...ごめんな、あゆ」「うぐう...うん。わかった.....」

よしよし、と頭をなでてやる。

「いい子だな、あゆは」「うんっ」

ボクはそんな幸せだった時にずっといたい。ただそれだけだ...。

あの日から、ボクは泣くことが多くなった。泣いていない時間を探しては生活をしている、そんな感じだった。ボクはあゆと過ごした町を離れ、叔母さんの秋子さんのところへとあずけられていた。それでも、ボクが泣き止むことはなかった。どれだけ泣きつづけても、涙が出てくる。本当に不思議だった。

「泣いてるの？」

その町で、最初に泣いているボクを見つけたのがその女の子だった。そして、どんなときも泣いている時には、隣に彼女がいた。

「いつになったら、あそべるのかな」

毎日のように泣き伏すボクを見つけては、話しかけてくる。ボクは泣くこと以外には何もしなかった。もう空っぽの抜け殻のような感じだった。それなのに、彼女はボクの側にいつづけた。そして話しつづけた。いったい、その子が何を待っているのか、ボクにはわからなかった。

「...君は何を待っているの？」

それがボクが彼女にかけた最初の言葉だった。

「君が泣き止むのを待ってるの。いっしょに遊びたいから」「ボクは泣き止まないよ。ずっと泣きつづけて生きるんだ」「どうして...?」「悲しいことがあったんだ...ずっと続くと思っていたんだ...。楽しい日々が...。でも、永遠なんてなかったんだ...」

そんな思いが言葉で伝わるとは思わなかった。でも、彼女は言った。

「永遠はあるよ」

そして、ボクの頬は、その女の子の手の中にあっただ。

「ずっと、わたしが一緒に居てあげるよ、これからは」

そう言って、ちゃんとボクの口にその女の子は口を当てた。

永遠の盟約。永遠を手に入れる盟約だ。

ボクはいろいろな人と出会って、いろいろな日々を生きた。ボクはあれから強くなったし、泣いてばかりじゃなくなった。ボクは盟約が動き出してから消えてなくなるまで、それに抗うようにしていろいろな人と、いろいろな女の子と出会った。ボクは幸せだった。

「滅びに向かって進んでいるのに...?」

いや、だからこそ、幸せなんだよ。滅びに向かうからこそ、全てがかけがえのない瞬間だったことを。こんな永遠なんて、もういらなかった。だからこそ、ボクは絆をもとめたはずだったんだ...。俺は。

だから、突然、瑞佳の名前を叫んだ。喉がからからに乾いていた。

「瑞佳っ!」「…………」「瑞佳っ!瑞佳ッ!」「……浩平、どうしたの?」

違和感とはそれだったんだ…。

「なに怖い顔してるんだよ」

取り繕ったような笑顔で俺を見る。そして、どこに行こうとしているのだろう。俺は…。それは確実な「予感」だった。この場所を去って、どこに向かおうとしているのだろう。この空だ…。向かえる場所もなく、訪れる時間もない。

…永遠。その言葉でつながっていたんだ。この空の向こうにその永遠の場所がある。あの日求めた世界だ。世界は永遠の盟約を交わした、あの時から始まって、そして、そこへ収束しようとしている。そこへ俺は向かおうとしているんだ。

家に辿り着いたので台所へ行ってみた。秋子さんはまだ帰っていないらしい。いつものように夕食を一人で食べる。そして、今日は疲れ切ったからとすぐに寝る事にした。

[2月14日・月曜日]

「浩平～、ちゃんと食事をちょっとは食べるんだよ～」

声をかけられ、頭を整えながら食卓を見る。朝食がなかった。一度だけならまだしも、二日も続けて。流しを見ると、一人分の食器だけがつけおきしてある。それは間違いなく秋子さんのものだった。彼女は、自分の分の朝食を食べ、そして出かけていったらしい。もしかしたら、何か、彼女が勘違いをしていただけなのかもしれない。だが最近明子さんには出会っていないし、この日常の繰り返しに変化が起きるほうがおかしい。

……。

一度会って話せばいいだろう。会って話して、どうして朝食を作ってくれなくなったのか聞けばいい。案外簡単な理由かもしれない。そろそろ自立しなくては行けない、とか…。秋子さんならあり得る話だ。だけど、それならそれで、書置きの一つくらいはあってもよさそうなものなのだが…。

……………。

「ほら、浩平～っ!時間ないよ～っ!」

再び瑞佳の声。

「ああ、今すぐ行くって」

自分が急速に消え行く感覚。それはまるで、遠い昔に描いた夢のようだった。ずっと昔。それは幼い日の戯れだ。

「望んだ世界が生まれていたとして、そうしたら、どうなると思う?」

俺は唐突に話を切り出した。

「望んだ世界…?」「そう。例えばこうだ」「小さい時にお菓子の国のお姫様になりたいと強く思っていた女の子がいたんだ」「あ、私がそう。そんなこと思っていたよ」「時がたって、本当にお菓子の国はその子の強い願望によって生まれていたんだ」「そんなことあるわけないよ」「あったとしたらだよ」「あ、うん…」「すると、どうなると思う?」「女の子は選ぶんだらうねえ。その国に移り住むのか、あるいはここに残るのか」

選択肢なんてあるのだろうか。違う。この物語には第三者が居たはずだ。

「王子様がいるんだ、その国には」「うん」「盟約を交わしていたんだよ。一緒に暮らす、っていう」「うん」「条件が変わった。すると、どうなると思う?」「うーん、そうすると、その国に強制的に連れて行かれるんじゃないかなあ」「すると、俺は…いや、その女の子は、この世界ではどうなると思う?」「いなくなるんだよ」

俺はその瞬間、薄ら寒さを覚えた。すると、俺は今から、この世界から消えてなくなろうとしているのか...? そんな子供の戯言のようなおぼつかない口約束が、現実には俺のこの世界での存在を危うくしているとも言うのだろうか...? まさか...。しかし、実際に俺はその過程上にいるように思える。秋子さんにはどうやら忘れ去られているらしい。瑞佳にさえ、俺の存在の記憶をあいまいにされつつある。本当に俺はあの遠い空の向こうへと旅立ってしまうのだろうか?

……。…………。

「浩平」

と瑞佳が立ち止まる。突然立ち止まって何のつもりなのだろう。靴紐でも解けたのだろうか。しかし、時間の余裕がさほどあるわけでもない。気にせず歩き続ける。そうしていると、後ろからと瑞佳が駆けてきて、そして俺に袋を手渡した。きれいにラッピングされた袋だ。

「今日はバレンタインデーだからね。あげるよ」「ありがとう...」「いつになく正直だね、浩平」「瑞佳...俺のことを大事に思っていてくれよ」「そんなこと言われなくたってわかっているよ」

だけど、そんな現実が、揺るぎつつある。過去の盟約が現実のものとなろうとしている...。その事実だけが遠く視界の先にあった。

[2月15日・火曜日]

「また浩平のせいで遅刻だよ～っ!」「だからお前がもっと早く起こせばいいんだ」「もーっ、面倒見きれないよーっ」「バカもん、先の先を呼んで行動しろっていつも...」「あ、浩平、前っ!」ズドーーーーーン!

また、校門に激突してしまった。

だけど、校門をくぐっていく人は、俺、折原浩平だともきがつかずに、誰か妙な人が居るとしか誰も思っていないようだった。

そして、自分のことを徐々に忘れつつある生徒がたくさんいる校内へ、校門をくぐるのがためらわれた。

「何やってるんだよ、浩平! さっさと行くよ」

そういって、瑞佳は駆けて行く。

「あ、あぁ...」

俺はそうつぶやいた...が、瑞佳のあとを追う気持ちにはなれなかった。

俺が消えるまでの時間はもうほとんど残されていない。自分が消える瞬間を他の人に感じさせるなんてことは俺にはできなかった。その場にいた人に限りない苦痛を与えることになるのだろうか。

胸を張っていけばいい。俺は幸せだったんだから。

人との会話から始まって、約束を交わして、再会をして、お互いを知り、他人でなくなり、互いが互いを干渉し、生活が少しずつ変わっていく...それは幾度となく繰り返されてきた日常のはずだ。...はずなのに。空を見上げる。今にもそこへ落ちて行きそうだった。本当に落ちて行きそうな感覚だ。俺は知っている。その世界が本当に存在して、ただ悔恨の中に生きていくこれからの自分を。

…………。

そして...俺、「折原浩平」が存在していた世界は崩壊した。一体、俺はこの先どうなってしまうのだろうか...。もし、奇跡が起こるとすれば、人との絆がどれほど強かったか。これにかかっ

ているのだろう……。だが、俺が存在していた『世界』が崩壊してしまった今、俺との絆を大事にしてくれている人はいるのだろうか。強く想っていてくれる人はいるのだろうか……。

月曜日

この日はいつもと変わらぬ一日だった。ただひとつの点を除いては。いつもの学校の帰り道、僕はいつもと同じ道を一人で歩いていたが、目の前を歩いている人が一瞬消えたような気がした。だが、次の瞬間にはまた普通に歩いていた。もちろん僕はただの目の錯覚だと思い、その日後は何事もなかったかのように過ごした。

火曜日

僕は昨日起った奇妙な出来事のことなどすっかり忘れてしまっていた。ところがまた学校の帰り道、昨日と同じ場所で、気が付くと今度は辺りが真っ白になっていた。そして、次の瞬間にはもとどおり平和な日常に戻っていた。僕はただの立ちくらみかな、と半信半疑ながらも無理やり納得した。

水曜日

まただ。今度は、出かけるときに辺りが真っ暗になり僕はまるで宇宙にいるようだった。10秒ほども続いただろうか、そのあと僕は元いたところに立っていた。僕は体調が悪いのだろうと思ってその日は学校を休むことにし、家に帰り、一日中寝ていた。

木曜日

今日も学校を休むことにした。僕は月曜から起っている変なことについて考えた。僕は何かだれかからじっとみられている気がした。僕は振り返ったが、そこには僕の部屋の白い壁があるだけだった。

金曜日

僕はなぜか孤独感を感じていた。僕の親は共働きでめったに家にいない。兄弟もいないし友達もいない。でも今まで孤独を感じたことなどなかった。他の人間はどういうことを考えているのだろう。他の人間はどのように見て、どのように感じるのだろう。そもそも、他の人間なんて存在するのか。また誰かに見られてる気がした。外からは子供たちの遊ぶ声がして、閉じたカーテンのすきまからは、日の光が差し込んでいる。僕はまた後ろを振り返ってみた。今度は昨日よりだいぶ速くだ。そしたら一瞬そこには壁がないような気がした。だが、次の瞬間またいつも通り白い壁があった。もう僕には分かっている。あの外から聞こえる声も、差し込む日の光も、全部僕にそれを気づかせないようにするためなんだ。でも僕は確かめるのが怖かった。その日はそのまま寝た。

土曜日

昨日からごはんを食べていない。全然腹が減らない。いや、本当は減っているのかも知れないがそれに気づかないでいるだけなのかも知れない。そもそも腹が減るっていうのは、どういう感覚だったのだろうか。それさえも分からない。昨日何か重要なことに気づいたような気がしたのだが、何だったのだろうか。その部分の記憶だけきれいになくなっていて、どうでもいいことだけ思い出せる。でも、もうそんなことはどうでもいいや。僕は、今日も一日中寝ていた。

日曜日

今日は朝から目がかすむ。体が思うように動かない。ごはんをずっと食べていないからか。でもごはんってどうやって食べるんだっけ。いつもは簡単に食べられたのに。あれっ、そういえば体ってどうやって動かすんだっけ。そう思うと全然大体が動かなくなっている。もうわけがわからなくなった。あれっ、息ってどうやってするんだっけ。そう考えた後にそれは考えてはならなかったと思った。でも、もう遅かった。僕は息できなくなっていた。苦しくなってきた何とかしようとする、何とか首が動いた。振り向くとそこにはあるはずの壁がない。ただ暗闇が広がっていた。もう一度前を見ると僕の部屋が消えている。僕の周り360度真っ暗闇になっていた。

月曜日、わたしはいつもどおり妻に玄関まで送られて、高校生の息子と一緒に家を出、勤め先に向かった。新宿駅で乗り換える。相変わらず駅構内を急ぐ人が多い。ひとの動きはまるで川の流れのようだ。反対方向に進む一群の人びとは一列になって突き刺さるように流れを分けていく。それが途絶えるとふたたび流線は合わさる。息子はいつものように「行って来ます」と言って別のプラットフォームに行く。勤め先に着いて、まずメールを読む。これが習慣だ。

火曜日、朝、電車の中でもみくちゃになりながらも、前に見たことのある乗客がいることに気づく。後ろの人の握りこぶしが背中に当たって痛い。耐えられなくなって、肘で後ろに合図する。新宿駅で下りると、後ろにいたと思われる若い男が睨む。同じ方向に行くではないか。知らん顔していたが怖かった。ストレスをわたしに向けて発散しないで欲しい。勤め先では最近得た「宇宙空間掩蔽」なるアイデアが実行可能かどうか調べるために簡単な計算を始めている。計算力が落ちたので結果を確認するために、昨日途中まで使い古しの紙でやっていた計算を初めからやり直す。

水曜日、新宿からはいつものように中央線の最後部の車両に乗る。遠くの学校へ通う子ども達が途中の駅で次々と乗り込んで来て、昨日と似たような会話を交わしている。武蔵境駅前のバス停で並んでいると、昨日わたしの直前にいたひとが、後から来て当然のようにわたしの前に入り、会釈する。ルール違反だよ。でもまあいいか。勤め先では昨日と同じ計算を始める。何度やっても結果に不安が残る。

木曜日、息子とともに6時47分発の電車の後ろから3両目、車両の一番後ろのドアから乗り込む。今日も背中にこぶしが当たる。なんてことだ。同じ男が後ろにいるらしい。昨日は少し離れた場所にいたようだが。また新宿で睨まれてしまった。先週までは木曜日に共同研究者のY氏が議論のために来ていたような気がするが、定かでない。そうであったとしても、彼も自分の研究室で昨日までの仕事に追われているに違いない。

金曜日、電車の中で同じ顔ぶれを見て安心する。背中の痛いのも同じだ。新宿での下りる順序もほぼ一緒だ。バス待ちの列はいまや同じ顔ぶれ同じ順番になった。いつも12時半にコーヒーを飲み来るK氏が12時20分に現れる。なぜか怒りが湧いてくる。12時半でなくてはいけないんだ。彼もなんとなく落ち着かないようすで、出直してくる。午後、昨日までやっていた計算を始める。だが、新しい計算用紙を使うのはいけないような気がする。結局、昨日使っていた計算用紙の計算式をボールペンでなぞりながら昨日と同じところまでいった。

土曜日、今日も出かけなくては。息子も起きて来る。妻はすでに同じ朝食を用意している。同じ物を買って来るようだ。冷蔵庫の中身も同じ配置にしてある。わたしの身体は油切れのようになって動きが緩慢になる。駅に行くと、昨日と同じようにホームには続々と人が集まってくる。2、3人が転ぶのを見た。足元に気をつけてくださいよ。電車が来る。われわれが同じ車両の同じドアから入ると、ほっとしたような声が近くから聞こえる。勤め先では、昨日と同じメールが来ていたので同じ返事を出す。夜、家に帰ってテレビを見ると、アナウンサーが昨日とまったく同じニュースを伝えている。それでいいのだ。

日曜日、朝起きると節々が凝っている。首を動かすのも辛い。ほぼ自動的に朝食を流し込み、

息子と一列縦隊で駅に向かう。電車の中では、乗客の配置が昨日と同じになるように狭い中で微妙な調整が行なわれる。武蔵境の駅でいつものように階段を下りるつもりであった。だが、つまづいてしまった。ふわっと浮いて背中から落ちた。痛っ。階段には14段毎に踊り場があって、幸い下までは落ちず最初の踊り場で止まった。良かった。衝撃は背中のバッグが受けてくれた。骨は折れていないようだ。

だがもうダメだ。昨日と違うことをやってしまった。立ち上がる気力がない。近くを通るひとは非難に満ちた表情でわたしを見る。下から登ってくる通勤客がわたしを踏み越えていく。わたしは痛みをこらえ、あお向けのまま目をつむった。

月曜. 月が、日焼けで大火傷
火曜. 火傷を、水で冷やし
水曜. 残った水で、木をそだて
木曜. 木を切りにきた金太郎
金曜. 金太郎、土砂崩れの下になり
土曜. 日差しで、土は干乾びて
日曜. お日様、月見団子をほうばった。

月見団子、最期の7日間

月曜日

今日は二限目に授業があるので午前9時30分に家を出た。特におもしろくもない授業を終え、友達の森山と一緒にランチを食べた。森山は明日から一週間旅行に行くらしい。うらやましい。

火曜日

今日は別に授業はないが、卒論研究のために大学にきた。2階の研究室から下を眺めていると、森山に似ている人物を発見した。「あれっ」と思ったが、夜に森山が旅行先から電話してきた。やはり、見間違いだった。

水曜日

今日は一日中家にいた。セールスの電話がかかってきた。その人は「森山」という名前だった。

木曜日

今日は1限目から4限目まで授業だった。帰りの途中で森山とすれ違った。間違いない。あれは森山だった。もう旅行先から帰ってきたのかな？森山に電話してもつながらなかった。

金曜日

今日は友達の富光と小倉へ行く約束だった。待ち合わせの場所にやってきたのは森山だった。「富光は？」と聞くと「なにってんの誰？それ？」という。富光に電話すると森山の携帯がなった。周りを見ると10人中1人は森山にそっくりなやつがいる。わけがわからないから帰って寝た。

土曜日

いつも土曜の午後1時に彼女が」くることになっている。「ピンポン」となったのでドアを開けると森山がいた。「何か用」と聞く「はっ？なにってんの？それより今日は映画にいこうよ。」といてくる。なにってんだこいつと思いながら彼女に電話すると森山携帯がなった。頭が狂いそうだ。とりあえず逃げるように車に乗り、町を走った。歩いている人がみんな森山だった。いつのまにか車で寝ていた。

日曜日

もうどうなっているのかわからない。誰かに助けて欲しい。「そうだ親に電話しよう。」さっそく実家に電話した。「はい、森山です。」すぐに電話を切った。頭が真っ白になった。とりあえず落ち着こうと思い、バックミラーで自分を見た。自分の顔が森山になっていた。

火曜日

僕はいつものように午前7時に起き、8時30分に学校に行く。1限から5限まで授業を受け、放課後には卒業研究をし、午後9時に家に帰り着く。それから夕食を食べ、寝る。何の変哲もない1日だった。唯一違うところと言えば、黒いスーツを着た人をやたらと見かけたというくらいだ。

水曜日

今日もいつものように午前7時に起き、8時半に学校に行く。1限から5限まで授業を受け、放課後に卒業研究をし、午後9時に家に帰り着く。それから夕食を食べ、寝る。毎日毎日同じことの繰り返しにうんざりだ。今日も黒いスーツを着た人をやたらと見かけた。昨日よりも増えている気がする。

木曜日

今日もいつもどおりの生活する

しかしそれにしても黒いスーツの人が多い。すれちがう人の半分は黒いスーツを着ている。黒いスーツの「彼ら」じゃ何者なのだろうか。「彼ら」は若いのか、老いているのか、男であるのか、女であるのかさえわからない。若いようでもあり、老いているようでもある。男のようでもあり、女のようでもある。ただひとつわかったのは、「彼ら」は皆同じ顔であるということである。

金曜日

今日もいつもどおりの生活する

黒いスーツの「彼ら」は着実に増えている。いや、「彼ら」でない人が減っているのかもしれない。黒いスーツの「彼ら」は僕と同じように、毎日同じことを繰り返しているのではないかと、ふと思った。

土曜日

土曜日は学校は休みだが、いつもの習慣で7時に起きてしまった。外に出かけてみた。黒いスーツの「彼ら」は、ますます増えている。というか、「彼ら」でない人は、数人しかいない。「彼ら」は土曜だというのに、いつものように学校や会社に出かけているようだ。やはり「彼ら」は、毎日同じサイクルで、同じことを繰り返しているようだ。

日曜日

今日は日曜日なのに、なぜか学校へ行かなくてはいけない気がした。日曜日だから授業などないはずなのに、1限から5限まで授業があった。出会う人は、すべて「彼ら」であった。通学中の電車で見かける人も、授業を受けている生徒も、そして先生さえも。

きっと、僕ももう「彼ら」になっているのだろう。

月曜日

世界中の人が「彼ら」になっていた。

「彼ら」は、毎日同じサイクルで、同じことを繰り返す。これからは毎日同じ日がやってくるだろう。

月曜日 今日朝起きたらすでに10時を回ってた。おそらく昨日のアメフトの試合で非常に疲れていたものだと思う。体が痛く、重たかった。接戦だったが負けてしまったので、とても機嫌が悪く学校へも行く気がしない。疲れているし、今夜はバイトがあるので休んでしまおうと思ってまた寝てしまった。そして、体の痛みがあるもののバイトをこなした。

火曜日 今日は普通に学校へ行き、授業もまじめに聞き、午後は図書館で友人の堀田君と実験のレポートを調べた後、部活の練習に行った。試合の疲れをとるという意味で軽く汗を流す程度だった。しかし体は疲れている。

水曜日 起きたら肩が痛い。肩がしびれていることがすぐにわかった。試合で怪我したのが今になって痛んできたのだらうと思って湿布をはってそのままにしておいた。体も疲れが取れないので今日は練習を休んで見学することにした。

木曜日 足まで痛くなった。肩の痛みも湿布だけでは効かず、何か病気ではないかと思い、整形外科へ行った。すると、医者からは何事もないような顔をして「異常なし」といわれ、痛み止めの薬と湿布をたくさんもらった。こんなに痛いのにと思って、とても腹が立った。

金曜日 やはり体は悪化していくばかりだ。脳までもが締め付けられるように痛い。ついに動けなくなってしまった。このまま死んでいくのかと思って、うなだれた。

土曜日 このまま死んでいくのはいやだと思って動けないからだの力を振り絞って病院へ行き、検査をしてもらった。しかし医者も原因不明な病気に悩み、本人の僕はもっと悩んだ。そしてそのまま入院した。

日曜日 そして僕の体は破裂した。ひとかたまりもなく…。そして僕の存在を知る人もいなくなり、そのまま時代は過ぎ去っていくのであった。

(月曜日) 連休明け。毎週のごとくこの日は、朝の弱い私にとって一つの地獄である。低血圧ぎみなのか、頭が痛い。動かない体に喝をいれて、学校へ。友達に借りていた本を返し、いつものようにバイトへ向かう。ごく普通の月曜日だった。

(火曜日) 今日もいつものように…とはいかず、早速遅刻をしてしまった。教室でとなりの席にいた男の子に話しかけられ、話しているうちにレポートを出さなければならないことが判明した。危ない危ない。こうして仲良く話しても、授業が終ると「それじゃあ」といってあっさりわかれ、教室の外に出るとすでに他人。そんなもんだ。今日はバイトがないので、そのまま家へ帰った。

(水曜日) 今日の講義はいつもと違う教官が前に立っている。講師が何かだろう。彼は普通に講義をし、学生はいつものように講義を受けている。少なくとも私にはそう見えた。だが、何か変な感じがする。その時だった。教官が「この点において…」と言った瞬間、突然学生達が大声で爆笑しはじめたのだ。教官まで笑っている。何がおかしいのだろう。全く分からない。そのままその日は授業にならず、ただ時間が過ぎるのを待って、教室を出た。よく分からないが変な一日だった。

(木曜日) しまった、忘れていた。今日はレポートの提出日だ。幸いなことに締め切りの時間は午後5時までだから、午前中は授業はないが課題をするために学校へ行こう。しかしよく考えてみると、課題が何だったか分からない。友達に聞こう…と思ったが、唯一一緒に受けている奴が携帯電話を持っていないので連絡のとりようがない。まずいな…。と、その時、携帯電話が鳴った。知らない番号だ。出てみると、授業中に話した彼だった。親切にも内容のみならず、提出場所まで教えてくれた。私は普通に「ありがとう。じゃあね。」といって電話を切った。「ああ、助かった」という安心感もつかの間、一つの疑問が湧いて出てきた。なぜ彼は私の電話番号を知っていたのか。名前すら知らない仲だったのに。事実、私は彼の顔すら満足に覚えていない。ハッと気付いてもう一度携帯電話の着信履歴を見てみた。「アオヤマクン」。だれだ？青山君って。確かにさっきは名前が出ていなかったはずなのに。しかし、勘違いということもあると思い直してレポートに取りかかった。やっとの思いで仕上げ、そのままバイトへ向かった。

(金曜日) 昨日までの変な日に比べ、今日のごく平凡な日だ。バイトもないし、友達と遊びにでもいこうか。週末ということもあり、浮き足立った気持ちでめぼしい友達に電話をかける。一人目は話し中だ。二人目にかけて。圏外。三人目。「お客さまのおかけになった電話番号は、現在使われておりません」。四人目、五人目……。つかまらない。しょうがないので、昨日の青山君に電話をかけてみる。彼は快く話にのってくれた。二人では寂しいと、友達を何人が呼んでくれるという。これで、週末は楽しく過ごせそうだ。私は今までの不安も疑問も忘れ、胸を踊らせていた。待ち合わせの時間。そこには7～8人集まっていたが、知った顔がない。きっと遅れてくるのだろう。と思ったその時、その中の一人が「やあ、待ってたよ」と声をかけてきた。誰？この人。そう思ったのが顔に出ているだろう、彼はこう言った。「青山だよ。青山！」。ふいに背骨に緊張感が走った。知らない。私はこの人を知らない。いくらうる覚えとはいえ、背格好くらいは覚えている。彼はこんなに背が高くない。そんな時にもう一人が